

主 題：朝明けに捧げる祈り

聖書箇所：詩篇 5篇

テーマ：あなたに喜びをもたらす祈りとは？

今朝、私たちが学びたいみことばは詩篇5篇です。

5:1 私の言うことを耳に入れてください。【主】よ。私のうめきを聞き取ってください。

5:2 私の叫びの声を心に留めてください。私の王、私の神。私はあなたに祈っています。

5:3 【主】よ。朝明けに、私の声を聞いてください。朝明けに、私はあなたのために備えをし、見張りをいたします。

5:4 あなたは悪を喜ぶ神ではなく、わざわざ、あなたとともに住まないからです。

5:5 誇り高ぶる者たちは御目の前に立つことはできません。あなたは不法を行うすべての者を憎まれます。

5:6 あなたは偽りを言う者どもを滅ぼされます。【主】は血を流す者と欺く者とを忌みきらわれます。

5:7 しかし、私は、豊かな恵みによって、あなたの家に行き、あなたを恐れつつ、あなたの聖なる宮に向かってひれ伏します。

5:8 【主】よ。私を待ち伏せている者がおりますから、あなたの義によって私を導いてください。私の前に、あなたの道をまっすぐにしてください。

5:9 彼らの口には真実がなく、その心には破滅があるのです。彼らののどは、開いた墓で、彼らはその舌でへつらいを言うのです。

5:10 神よ。彼らを罪に定めてください。彼らがおのれのはかりごとで倒れますように。彼らのはなはだしいそむきのゆえに彼らを追い散らしてください。彼らはあなたに逆らうからです。

5:11 こうして、あなたに身を避ける者がみな喜び、とこしえまでも喜び歌いますように。あなたが彼らをかばってください、御名を愛する者たちがあなたを誇りますように。

5:12 【主】よ。まことに、あなたは正しい者を祝福し、大盾で囲むように愛で彼を囲まれます。

イントロ：あなたの祈りの生活はますますあなたに喜びをもたらすものへと変えられているでしょうか？

この時間とともに考えたいことは「祈りについて」です。これからみことばの内容を見ていくに当たって、皆さんひとり一人に考えていただきたい質問があります。それは「あなたの祈りの生活はますますあなたに喜びをもたらすものへと変えられ続けているでしょうか？」ということです。

恐らく、今日ここにおられる皆さん、また、ライブを見ておられる皆さん、礼拝に参加されるに当たって、多くの人は礼拝の前に自宅や車の中で祈りをささげて来られたかと思えます。また、私たちの先週一週間を振り返ってみれば、それぞれ様々な機会に主の前に祈りをささげられたことと思えます。では、それらの祈りはあなたの心に喜びをもたらすもの、喜びで満たすものだったのでしょうか？クリスチャンにとって祈りは大切なもの、また、何よりも私たちにとってすばらしいものであることを私たちはよく知っています。私たちは祈りを通して、朝、昼、夜、どんなときも、また、どんなところにあっても、天の父を礼拝し賛美をささげることができます。

私たちは祈りを通して、悲しみや困難の中にあっても、主に身を委ね主に助けを求めることができます。私たちは祈りを通して自分の思いや願いを主に知ってもらい、その主がみこころに沿って答えてくださることを確信しています。私の主は自分の祈りをいつも聞いてくださる、自分のことを力づけ勇気づけ希望を与え、そして、私に平安を与え守り導いてくださると、このように私たちは祈りを通して安らぎを持つことができます。

また、この祈りが私たちにとってすばらしいものであるだけでなく、日々の信仰生活の歩みに不可欠なもの、神からの責任であることも私たちはよく知っています。よく知っている1テサロニケ5：17には「絶えず祈りなさい。」とあります。私たちにとって祈りというものは「するか、しないか」と選択するものではありません。祈りは神からの命令です。だからこそ、そのことを知っていた者たち、祈ることが自分の責任だと知っていた者たち、すばらしいものだと知っていた人たちは祈りに熱心でした。

思い返してみてください。旧約聖書を見ると、アブラハムやモーセ、エリヤ、ネヘミヤなどが神の前にいつも熱心に祈っていた姿を見ることが出来ます。ダニエルについてはこのように書かれています。ダニエル書6：10「ダニエルは、その文書の署名がされたことを知って自分の家に帰った。——彼の屋上の部屋の窓はエルサレムに向かってあいていた。——彼は、いつものように、日に三度、ひざまずき、彼の神の前

に祈り、感謝していた。」、新約聖書にもいろいろな人物を見ますが、何よりも私たちの模範であるイエス・キリストがいつも祈りをささげておられたことを見ることができます。時には朝早く起きて祈りをささげ、マルコ 1 : 35 「さて、イエスは、朝早くまだ暗いうちに起きて、寂しい所へ出て行き、そこで祈っておられた。」、ときには様々な働きを終えて疲れ切った一日の終わりに、一人荒野に退いて祈られた姿を見ることができます。マタイ 14 : 23 「群衆を帰したあとで、祈るために、ひとりで山に登られた。夕方になったが、まだそこに、ひとりでおられた。」。

十字架に架けられる前のゲッセマネの園でも、十字架の上でも、主は最初から最後に至るまでいつも祈っておられました。人として来られた神の子が祈りの大切さを知っていたゆえに、いつも祈っていたのです。私たちの主はそのような祈りの人だったのです。私たちの主であるイエスに祈りが必要であったなら、私たちにとっても言うまでもなく、その歩みには必ず祈りが必要なのです。私たちはみな「祈りはすばらしいものです。祈りは私たちの責任です。」と言われるとき、「その通りです」と答えるでしょう。

同時に、私たちが祈りを考えるとき、すばらしさや責任を知っているだけでなく、祈ることに難しさを感じることをみな経験します。祈ることにおいて自分は満足している、祈りの生活において満足をもって今生きていますと、そのように言える人は恐らくいないでしょう。忙しさに追われて祈ることをないがしろにしてしまうことがあります。祈りへの熱心さが心の中で冷めてしまっ、ささげる祈りがただ同じことばを繰り返しているだけと、そのようなことになってしまうこともあります。祈らなければいけないからと義務感だけで祈ることがあったり、また、どれ程祈っても主が答えてくださらないとき、祈っていても徐々に主への期待が自分の内側から薄れていく、失われていくこと、そのようなことを経験することもあるでしょう。

皆さん、このような自分の姿を見ることはないでしょうか？「祈ることは私にとって難しい」と。マルティン・ルターもこのように言っています。「祈ることは難しく、大変な労力を要するものである。みことばを語るよりも、教会の他のどの働きよりもはるかに難しい。」と。私たちは例外なくみな祈ることにおいて難しさを感じます。では、どうすれば私たちは自分の祈りの生活において成長することができるのでしょうか？もっと言えば、どうすれば喜びにあふれた祈りの人へと変わることができるでしょうか？

今日、私たちが見ようとしているこの詩篇 5 篇、ここにはこれまで見て来た苦しみに遭っているダビデの姿が再び記されています。少し違うのは、3 篇、4 篇とは異なって、ダビデがいったいどのような苦しみに遭っていたのか、どんな状況に置かれていたのか、その歴史的背景についてはだれも分からないのです。ただ、少なくとも、ここには「偽りを言う者、…欺く者、」、「彼らの口には真実がなく、その心には破滅があるのです。彼らののどは、開いた墓で、彼らはその舌でへつらいを言うのです。」と、ことばや口に関することばが繰り返し記されていることから、ダビデは彼を困む敵のことばによって酷く傷つけられ苦しんでいたと言えるでしょう。彼はありもしないことで誹謗中傷を受け、嘘や偽りを浴びせられ続けたことによって大きな悲しみの中にいたのです。そのような悲しみ、自分の心を締め付けるような苦難の中でダビデがしたこと、それは「祈ること」でした。

ダビデは朝、目を醒まし、自分の周りを困む敵の脅威を感じる朝明けに、主の前に静まり祈るのです。ここに私たちが学ぶべき祈りの姿があります。特に、ここでダビデは祈りに関して四つのこと、「祈りの姿勢」「祈りの対象」「祈りの原動力」「祈りの確信」について、私たちに教えてくれています。どんな態度で私たちは祈るべきなのか？だれに対して祈るべきなのか？私たちの祈りの原動力とは何か？そして、祈りを通して私たちはどんな確信を持つことができるのか？そのことを教えるダビデのことばをともに学んでいきましょう。そのみことばを通して、祈りがどれ程すばらしいものなのか、そのことを改めて考え、そして、私たちひとり一人が益々喜びをもって祈る者へと変えられていく、その励ましになることを心から祈っています。

☆祈りに関して

1. 祈りの姿勢 1-3 節

1-3 節の中に三つの姿勢を見ることが出来ます。

a) 熱心さ : ダビデの祈りは熱心な祈りでした。苦しみの中にいたダビデは自分の祈りを主が聞き入れて答えてくださることを熱心に求めていたのです。彼の切迫感の溢れることばがあります。そこに目を留めて見てください。

「私の言うことを耳に入れてください。」 = 言い変えるなら、「私の発することばに注意して耳を傾けてください」ということです。

「私のうめきを聞き取ってください。」 = 「うめき」とは声にならないような深いため息、心の中でつぶやくそのつぶやきのことです。酷い苦しみの中に置かれていたダビデは、余りにも深い悲しみが自

分を押しつぶし、ある時は声を挙げて祈ることができないときがありました。声にならない中で私のうめきに、心の中の声を聞き取ってくださいと、主にお問い合わせをするのです。

「私の叫びの声を心に留めてください。」 = ダビデは「私の発することばだけでなく、私の心のうめきだけでなく、私の悲痛の叫びを聞き入れてそれを心に留めてください」と祈るのです。

彼の祈りは切実でした。自分の置かれている状況を見るときに、「主よ、どうか私の祈りに私の心の声に私の叫びに耳を傾け、私の苦しみをわかってください。私にはあなたが必要です。」と熱心に祈ったのです。

b) へりくだっていた : 熱心なだけでなく、彼の祈りはへりくだった祈りでもありました。2節の続きに「私の王、私の神。私はあなたに祈っています。」とあります。ダビデはイスラエルの王でした。だからこそ、王という存在がどれ程力ある存在か、どれだけ支配力をもっているかをよくわかっていました。しかし、彼が自分の置かれている状況、困難を見、自分自身のうちに目を向けたときに、自分にはこの状況をどうすることもできない、この状況を変える力などもない無力な者だと、そのことに気付いて、自分よりも優れた王の王に祈りをささげるのです。「主よ、私はイスラエルの王です。しかし、あなたこそがすべてを支配されている王の王です。主よ、あなたこそこの世界を造り、初めから終わりまで永遠から永遠まで存在する変わる事のない、全知全能の神です。」と、ダビデは自分の弱さ、そして、神の偉大さをよくわかっていました。だからこそ、彼は他のだれでもないあなたに祈っているのですと、そのように強調したのです。ダビデは主の前にへりくだり心からの祈りをささげています。

c) 期待にあふれている : 3節「【主】よ。朝明けに、私の声を聞いてください。朝明けに、私はあなたのために備えをし、見張りをいたします。」、苦しみに押しつぶされそうな状況の中で、朝、目を醒ましたダビデは祈りをささげ主のために、

備えをする = この「あなたのために備えをし、」ということばは「主のためにいけにえの用意をする」とか、「主にささげものをするためのたきぎを整える」という意味で他の聖書の箇所でも用いられています。たとえば、レビ記1:12に「また、それを、部分に切り分け、祭司はこれを頭と脂肪に添えて祭壇の上にある火の上のたきぎの上に整えなさい。」と書かれています。

ダビデは主の前に出て行くときに、正しい態度で出て行きました。私たちがよく知っている通り、主の前にいけにえをささげるという行為は、古代イスラエルにおいて、神の前に出ることを望む者が行う正式な礼拝の形でした。要するに、ここでダビデは自分が祈りをささげる相手が主であること、神であることを知っていたゆえに、それにふさわしい態度、ふさわしい方法をもって祈りをささげたということです。

見張りをする = それで終わりではありませんでした。ダビデは備えをした後でこう言っています。「見張りをいたします。」と。「見張る」ということばは面白いことばで、エゼキエル書では敵が入って来ないかどうかを注意深く観察している見張り人を指して用いられています。33:2-3「:2 人の子よ。あなたの民の者たちに告げて言え。わたしが一つの国に剣を送るとき、その国の民は彼らの中からひとりを選び、自分たちの見張り人とする。:3 剣がその国に来るのを見たなら、彼は角笛を吹き鳴らし、民に警告を与えなければならない。」と。

皆さん想像できますね。敵が来ないかどうか、塔の上で見張り人は見張っているのです。少しの動きも見逃さないように、ちょっとでも動きがあると「あれは敵ではないか！」と、慎重に注意深く見張り人は観察しているのです。ここでのダビデも同じように、自分の祈りに対して神が答えてくださることを注意深く見張っていたのです。なぜか？それは主が自分の声に耳を傾け、そして、その祈りに答えてくださるその瞬間を「今か今か」と期待して待ち望んでいたからです。

これらがダビデの祈りの姿勢でした。熱心でへりくだって、そして、期待をもって主の応答を待ち続けると…。では、私たちの祈りはどうでしょう？皆さん、今日朝起きてささげた祈りはこのダビデの姿勢をもった祈りだったのでしょうか？私たちが日々ささげる祈りは主に期待を置いた熱心な思いからささげているのでしょうか？また、私たちの祈りは神の前にへりくだったものなのでしょうか？多くの場合、私たちは主を王として認めるのではなく、自分を王としたまま祈ってはいないのでしょうか？自分にはどうしようもない状況が起こったときは熱心に祈るけれど、でも、普段の生活はあたかも自分には問題がないような、自分の力で何とでもなるように振舞ってはいないのでしょうか？

ダビデは自分の弱さを知っていました。だからこそ、朝起きてすぐに自分の力の源である主に祈りをささげたのです。皆さん、私たちは今朝、目を醒ましたときに、まず、何をしたでしょうか？何を真っ先に考えたでしょうか？メールやメッセージが届いていないか携帯を確認することだったでしょうか？今日はこんな予定がある、それをしなければならぬとそんなことを考えたでしょうか？私たちはいったいいつ、朝目覚めて主の前にへりくだり「主よ、今日生きるためには私にはあなたの力が必要です。誘惑に対して私の力では負けてしまいます。だから、助けてください。」と、このような祈りを祈ったでし

ようか？

また、私たちは今実際に主の前にいけにえをささげる必要はありませんが、この王の前にふさわしい態度、ふさわしい心構えをもった祈りをささげているのでしょうか？考えてみてください。あなたが王の前にささげものを持って出て来ます。もし、あなたが「いや、私は今やるべきことがあるのです。」、「今、私は忙しいので、急いでいるので…」と王の前にささげものを置いてすぐに立ち去ってしまったなら、そのささげものが最高のものでなく残り物であったら、あなたのささげものが心が全くこもっていないもので、毎回同じものを繰り返してささげ続けているなら、この王は私たちのことをどのように思うでしょう？皆さん、私たちが覚えておかなければいけないことは、私たちがささげる祈りはまず何よりも「主への礼拝」だということです。私たちは願いを聞いてもらうことはできます。しかし、私たちの祈りの本質は主への礼拝です。それなら、私たちが今朝ささげた祈り、先週ささげた祈り、この祈りは主に、この王にふさわしい態度、正しい姿勢でささげた祈りだったのでしょうか？

あなたの祈りを聞いて主は喜ばれるのでしょうか？それとも、あなたのささげる祈りを主は悲しまれるのでしょうか？ダビデは熱心にへりくだって期待しながら祈りをささげました。私たちもこのような姿勢をもって祈りをささげることが必要だということです。

2. 祈りの対象 4-6節

祈りの対象 ⇒ 聖い神

いったいだれに向かってダビデは祈っていたのでしょうか？彼が祈りをささげていた相手は「聖い神」です。4節にはこのように記されています。「あなたは悪を喜ぶ神ではなく、わざわざは、あなたとともに住まないからです。」と。ダビデは自分を傷つける敵が周りに溢れ、悪がはびこっているそんな状況の中で、自分の神が悪を憎まれ悪を喜ばれないお方であることを覚え、この方に信頼を置きました。あなたは悪を喜ばれる方ではない、「わざわざは、あなたとともに住まないから」と言います。この「わざわざは、あなたとともに住まないから」という表現は、言い変えるなら「ありとあらゆるどんな悪も聖い神に受け入れられることは決してない」ということです。どんな大きな罪でも、どんなに小さな罪でも、罪を持っている罪人は絶対に神とともに住むことを許されることはないということです。

私たちの神は悪を喜ぶ方ではありません。では、ここで皆さん、少し自分自身のことを考えてみてください。皆さん、私たちの心のうちには主が喜ばれない悪い思いや罪はないのでしょうか？恐らく、ここにおられる皆さんは「もちろん、私のうちには罪があります」とそのように答え認められるでしょう。問題は、その罪に対して私たちはどのように向き合っているかということです。私たちの神はいついかなる罪を喜ぶことがない。もし、私たちが自分のうちに罪をもっているなら、神が絶対に受け入れることができない罪に気付いていながら、それを自分のうちに置いておいて「よし」としていませんか？

確かに、私たちイエス・キリストによって救われた者、イエス・キリストの十字架の血潮によって贖われた私たちの罪は完全に赦されています。ローマ8：1に「こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。」とある通りです。だからこそ、私たち救われている者は自分の罪が赦されたそのすばらしい希望をもって今日を歩んでいくことができるのです。

しかし同時に、罪赦された私たちは光の子どもとして歩む、神に似た聖い者になるという責任を負っています。私たちが神に似た聖い者になろうと願い成長するときに、私たちは必ず自分の中に罪があることを見出し始めます。あなたはその罪に対して、その罪を益々憎む者になっているのでしょうか？私たちが神が見るようにその罪を見、神が罪を扱われるように罪を扱っているのでしょうか？それとも私はもう赦されているから私に罪があっても問題ないと、神が憎まれる罪を軽く扱ってはいませんか？

なぜなら5節から、聖い神が悪に対して罪に対してどのように応答されるかが記されているからです。

・ 誇り高ぶる者たちは — 御目の前に立つことはできません

プライドのある者は神の前に立つことができない、もっと言えば、誇る者は神の視界に入ることさえ許されない。神とともに歩むことなど決してできない。自分の力に頼るもの、自分の知恵に頼る者、この真の神以外のものに目を向ける者、自分は神よりも優れていると思う者、そんな人は主の前に立つことなど決してできないと、みことばはそのように教えるのです。では、私たちの心にプライドの問題はないのでしょうか？

・ 不法を行うすべての者 — 憎まれる

あらゆる罪、汚れを行う者、また、そのような性質をもっている者をすべて神は完全に拒絶されるということです。では、私たちの心にそんな罪の性質はないのでしょうか？日々の生活の中で神に喜ばれないことを行っていないのでしょうか？

・ 偽りを言う者 — 滅ぼされる

嘘をつく者、だます者、ありもしないことで無実の者を悪く言う者、そんな者を神は必ず滅ぼされるとみことばは教えるのです。では、私たちの口はどうでしょうか？私たちの話すことは偽りに

満ちていないでしょうか？いつも真理を話すものでしょうか？

・血を流す者と欺く者 — 忌みきらわれる

暴力を振るう者、人を肉体的に傷つけることがなかったとしても、悪意あることばで傷つける者、また、外側は何の問題もないとそのように振舞っているけれど、内側が汚れている者、罪で汚れている、そんな偽善的な者を主はひどく嫌っておられるとみことばは教えているのです。

思い出してください。イエスはマタイ23：25でこのように言われていました。「わざわざいだ。偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちは杯や皿の外側はきよめるが、その中は強奪と放縦でいっぱいです。」と。イエスも偽善的なものを憎まれました。忌み嫌われました。私たちは周りの人を様々な暴力で傷つけたりしていないでしょうか？また、私たちは人前では良いことをしている。教会では良い行いをしていると見せかけながら、見えないところでは、神の憎まれるようなことをしてはいないでしょうか？

私たちの主は私たちの外側、私たちの行うことを見られるお方ではありません。私たちの心を見られるお方です。私たちの心が主が見られたときに、主が喜ばれない、主が受け入れることのない、そんな罪を持ち続けていないでしょうか？私たちは残念ながら、自分のことよりも他の人のことのほうがよく見えます。それは、私たちの心が自分の罪が明らかになること、自分がその罪によって罪悪感を覚えたり人に責められることを望まないからです。私たちは否定しようとしまいと自分のことが大好きです。だからこそ、自分が傷つくこと、自分が責められることを望みません。

自分のことが責められたくないから、自分の中の罪を見ることよりも、周りの人の罪に目を向け、そして、自分にこう言い訳をするのです。「自分はこの人よりは優れている。私には問題がない。」と。また、私たちは自分が相手にしたことよりも相手にされたことをよく覚えている者です。約束を守らなかったことよりも、約束を破られたことを、あわれみのないことばを発したことよりも、あわれみのないことばを受けたことを、赦さなかったことよりも赦されなかったことを、私たちは自分自身の罪を棚に上げ互いを非難し合ったり文句を言ったり、人の居ないところで陰口を言ったり、自分が受けた仕打ちをいつまでも憶え続けているような者です。

兄弟姉妹の皆さん、私たちはどのような神に祈りをささげているのか？そのことを忘れてはいけません。私たちが祈りをささげる神は確かに私たちのことを愛して守ってくださる愛のお方です。しかし同時に、この神は罪をいっさい受け入れることをしない、そんな聖い神だということです。だからこそ、私たちは自分のうちに罪を見るなら、その罪を軽々しく扱ってはいけません。皆さん、朝起きて、自分のうちにある罪を認め、そして、「主よ、私のこの罪を赦してください。あなたが私のこの罪を憎まれていることを知っています。だから、この罪を赦してください。私は悔い改めます。」と祈ったのはいったいいつだったのでしょうか？

もちろん、私たちは自分の力でこの罪を取り除くことは出来ません。ですから、主に「私にはこの罪を取り除くことは出来ません。どうか、私のうちからこの罪を除いてください。」と熱心に祈っているのでしょうか？キリストに似た聖い者になっていきたいと、そのような願いが私たちの思いに、私たちの祈りに益々大きくなっているのでしょうか？私たちが祈りをささげる神は聖いお方です。この方にふさわしい祈りを私たちはささげているのでしょうか？

3. 祈りの原動力 7-10節

祈りの原動力 ⇒ 主の恵み

苦しみの中、聖い神に目を向け祈ったダビデは、自分を取り囲む敵に対して主が正しく応答して下さることを確信していました。聖い神はご自分の義に基づいて、間違っている者には必ず正しいさばきをして下さると信頼していました。皆さん、ダビデは自分だけが特別、自分には全く問題がないと思ってはいませんでした。むしろ、神が憎まれるリストを挙げたときに、神が憎まれるものがどんなものかを挙げたときに、まさに、自分こそがそのリストに当てはまる罪深い存在だということをよくわかっていました。自分こそプライドに溢れ、自分こそ人を欺き、バテシェバと姦淫の罪を犯し、あげくに夫ウリヤの血を流すという人殺しであることをよくわかっていました。ダビデは確かに苦しみの中で主の助けを必要としていましたが、罪に汚れた自分がそのようなことを神に求める資格などないことをよくわかっています。本来、自分は聖い神の前に立って祈りをささげることができる者ではないと。自分自身がどれ程罪深い者であるのか、どれ程愚かな者であるのか、そのことを認めていました。

だから、彼は7節でこのように言います。「しかし、私は、豊かな恵みによって、あなたの家に行き、あなたを恐れつつ、あなたの聖なる宮に向かってひれ伏します。」と。ダビデが聖い神の前で祈ることができた理由は何だと言っていますか？ダビデが主の前に喜ばれることをしたからでしょうか？ダビデが罪のない優れた人間だったからでしょうか？いいえ、彼も私たちと何も変わらない罪人でした。彼は自分自身がどれ程罪深い者かをよく分かっていた。彼が祈ることが出来たたった一つの理由、それは「主の恵み」です。主を信じ主を信頼する者、その人に主が与えられる愛がダビデが主の前に出ることを可能に

したのです。

皆さん、私たちが主の前に祈ることが出来ること、それは当然の権利ではありません。私たちは先に見たように、罪をもっている罪深い者であるゆえに、心の中が罪で汚れているゆえに、私たちは本来聖い神の前に立つことなどできる者ではありません。しかし、私たちは今主の前に祈ることができます。私たちが主の前に正しい行いをしたから、私たちのプライドはなくなったから、私たちの偽りの口がなくなったから、私たちのうちから正しくない汚れた思いが消え去ったから、私たちがそれに値する者だから祈ることが出来るわけではありません。主が私たちを愛してくださったから私たちが祈ることが出来るのです。私たちは主が決して受け入れることができないそんな罪を行い、主に逆らう罪人であったときに、主は私たちのためにその罪の赦しを与えてくださったのです。

ローマ5：8「しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。」、主が私たちに恵みを示してくださったからこそ私たちが救われ、主が私たちに恵みを示してくださったからこそ、こんな愚かな私たちが聖い神を「アバ、父」と呼ぶことができ、主が私たちに恵みを示してくださったからこそ、私たちは主の前に出て自分の思いを知っていただくことができるのです。私たちがどのような存在かではなく、主の変わらないご性質、主の変わらないその愛が私たちを救い祈ることを可能にしてくださったのです。

ですから、もし、この中に主を自分の救い主として信じ受け入れていない方がおられるなら、私たちが覚えなければいけないこと、それは私たちはみな、聖い神の前に立っているということです。聖い神は罪をそのまま置いておかれることは決してありません。必ず、さばきを与えます。必ず、そのよう者を滅ぼされます。しかし、この神は同時に、この方を信じる者、この方を受け入れこの方のために歩む者に恵みを与えてくださいます。ですから、もし、その方を知らないのであれば、どうぞ、今日、その方を知って帰ってください。

また、もし、この中におられる皆さんの中で、祈るときに心に感謝がなく喜びを失っているなら、自分が祈っている相手をよく考えることです。そして、二つのことを思い出すことです。「自分がどれ程罪深い者なのか」、そして、「そんな自分に主は恵みを注いでくださった」です。私たちは自分がどれ程罪深い者であるか、そのことを知れば知るほど主の恵みを感謝する者になります。そして、主の恵みを知れば知るほど、この主が悲しまれる罪を犯したくないという恐れが私たちの心に増し加わっていきます。ジェームス・ボイスという神学者はこのように言っています。「聖くなるためのカギは、神がご覧になるように罪を見ること、そして、主に近づくことである。」と。ダビデはまさに、自分には決してふさわしくない恵みを主が与えてくださったことを心から感謝し、恐れをもって主の臨在を覚える聖なる宮に向かってひれ伏します。「主よ、感謝します。私はどうしようもない罪人です。聖い神の前に立つ資格などいっさいありません。しかし、そんな私にあなたが恵みを注いでくださった。だから、私はこうして祈ることができます。そのようなあなたを誉め称えます。」と。

そんなダビデは続けてこう祈ります。8節「【主】よ。私を待ち伏せている者がおりますから、あなたの義によって私を導いてください。私の前に、あなたの道をまっすぐにしてください。」、恵みを与えられたダビデはこれから自分が主に喜ばれる道を歩んでいくに当たって、主の力、主の守りが必要であることをよく分かっていました。ここにある「導いてください。」ということばは、詩篇23：3にある「主は私のたましいを生き返らせ、御名のために、私を義の道に導かれます。」の「導かれます」と同じことばが用いられています。要するに、自分がこれから歩もうとしているその道に敵が待ち伏せていることを知っていたダビデは、主が羊飼いとしてみんなを歩んでくれることを願ったのです。「主よ、どうか、私の羊飼いとしてみんなを歩んでください。あなたがいっしょでなければ私は敵に騙され、あなたの義の道から外れてふさわしくない行いをしてしまうかもしれません。だから、どうか、私を助けてください。」と。

これは私たちにとっても必要な祈りです。特に、9節を見てください。「彼らの口には真実がなく、その心には破滅があるのです。彼らののどは、開いた墓で、彼らはその舌でへつらいを言うのです。」、ダビデが自分を欺くために待ち伏せ主の守りが必要だと訴えた敵は、ことば、口に関する問題を抱えていました。私たちにとってもこの「口」というものは大きな問題を引き起こす可能性があることを私たちはみなよく知っています。人を励ますことのできる口が、人を傷つけ深い悲しみをもたらすことがあることを私たちはよく知っています。私たちはときに皮肉や陰口を言うことがあります。ときに、相手に媚びへつらうことがあります。真実ではなく嘘をついたり、正しいことであってもそれを武器に相手を追い詰めて傷つけることがあります。自分が正しいという思いから相手を非難することがあります。また、何よりも、私たちは噂話やゴシップが大好きです。「あのことを聞いた？あの話知っていた？あの人が言ってたんだけど…」と。

皆さん、そもそも人がなぜ陰でこそこそと噂話をするのが好きなのか？知っているでしょうか？箴言18：8には「陰口をたたく者のことばはおいしい食べ物ようだ。腹の奥に下っていく。」とあります。

私たちにとって陰口は一見すれば良い臭いのするおいしい食べ物に見えるのです。だからこそ、みな好んでするのは。しかし、実際にそれは人を腐れ切った墓へ死へと導くものなのです。噂話が原因で心がざわついたり人を傷つけたり、関係が壊れてしまったり、そのようなことを経験したことはみなあるでしょう。そして、私たちみなが抱えているこのことばの問題の最も深刻な点は、私たちの口は単に心に満ちているものを話しているに過ぎないということです。

イエスは次のように言われたことを覚えておられますか？マタイ 12 : 34-35 「:34 まむしのすえたち。おまえたち悪い者に、どうして良いことが言えましょう。心に満ちていることを口が話すのです。:35 良い人は、良い倉から良い物を取り出し、悪い人は、悪い倉から悪い物を取り出すものです。」、壊れた心からは壊れたことばしか出て来ません。私たちはときにことばで失敗してしまったとき「何ということをしてしまったのだろう！何と言うことを言ってしまったのだろう！」と反省して、そのことばを言わないようにと気を付けます。しかし、時間が経てば、人が変われば、状況が変われば私たちは同じことばを口にしてしまうことがあるのです。

聖書が教えること、それは私たちの口から出て来ることばは私たちの心を映しているに過ぎないということです。問題は私たちの心だということです。ですから、問題が起こった時にその問題を引き起こしている私たちの心を見よことばによって変え、その心を主が聖めてくださることを祈り求めることが必要なのです。そして、そのような過ちに陥ることがないように、主が自分の心を守ってくださるように熱心に祈ることが必要です。そして同時に、そのような悪に対して最後に主が正しいさばきをしてくださることを祈り求めていくのです。10節「神よ。彼らを罪に定めてください。彼らがおのれのはかりごとで倒れますように。彼らのはなはだしいそむきのゆえに彼らを追い散らしてください。彼らはあなたに逆らうからです。」

ダビデは祈りの原動力が「主の恵み」であることを理解していました。罪をもっている者にとって、罪深い私たちにとって、聖い神の前に祈りをささげることは特権だと言います。では、私たちのささげる祈りはどうでしょう？このような感謝をもった祈りでしょうか？また、私たちは自分の心が汚れていることを知っているなら、間違った道に陥らないように主に熱心に「私の心を守ってください。」と祈り続けているのでしょうか？それとも、感謝もしないであたかも祈ることが当然であるかのように、そして、当然であるだけでなく、同じことばを何度も繰り返したり、喜びや熱心さを失ってただ何となく祈っている、そのような者でしょうか？私たちが祈ることができるのはただ主の恵みによるのです。

4. 祈りの確信 11-12節

祈りの確信 ⇒ 喜び

11節「こうして、あなたに身を避ける者がみな喜び、とこしえまでも喜び歌いますように。あなたが彼らをかばってください、御名を愛する者たちがあなたを誇りますように。」、ダビデが祈りを通して得た確信、それは「喜び」でした。主が私の祈りを、主が私の心のうめき声を聞いてくれる、聖い神が私を取り囲むその悪を正しくさばいてくださる、正しく報いてくださる。そして何より、主に身を避ける者、その者を主が愛し守りを与えてくださると、その確信をダビデはもっていたからこそ、喜びをもって彼は祈りをささげたのです。それは、彼を苦しめていた敵がいなくなったからでも、彼を欺き誘惑する脅威がなくなったからでも、これから先の歩みにおいてダビデの人生にいつかの障害がなくなることを約束されたからでもありません。ダビデが喜びをもっていたのは、ただ聖い神がいつでもどんな状況にあっても私を守ってくれる、自分を正しく扱ってくれるという信頼ゆえです。そのことが彼の心に喜びをもたらしたのです。12節「【主】よ。まことに、あなたは正しい者を祝福し、大盾で囲むように愛で彼を囲まれます。」と。

私たちも同じです。私たちは試練を乗り越える力が私たちのうちにあるから喜べるのではありません。試練さえも支配されているお方が私たちを愛し、私たちをどんなときにも守ってくださるというその約束を信じているからこそ、私たちはいつも喜びをもって祈りをささげることができるのです。ダビデは正しい者を主がご自分の愛をもって守り導いてくださることを信じていたからこそ、苦しみの中にあってもこの主に身を避けたのです。

これは私たちにも与えられているすばらしい約束、すばらしい祝福です。私たちの主にあって、私たちの主は私たちのことをいつも守ってくださると、詩篇 91 : 4-9 はその主の守りのすばらしさを分かり易く描写してくれています。「:4 主は、ご自分の羽で、あなたをおおわれる。あなたは、その翼の下に身を避ける。主の真実は、大盾であり、とりでである。:5 あなたは夜の恐怖も恐れず、昼に飛び来る矢も恐れぬ。:6 また、暗やみに歩き回る疫病も、真昼に荒らす滅びをも。:7 千人が、あなたのかたわらに、万人が、あなたの右手に倒れても、それはあなたには、近づかない。:8 あなたはただ、それを目にし、悪者への報いを見るだけである。:9 それはあなたが私の避け所である【主】を、いと高き方を、あなたの住まいとしたからである。」、

私たちも今日同じ主の愛に守られ、同じ主が私たちとともに歩み、同じ主が私たちの祈りを聞いてくださる。私たちが苦しくてうめき声しか上げられないときに、その祈りさえも聞いてくださる。そんな神が私たちとともにいてくださる。この確信が私たちの祈りに大きな喜びをもたらしてくれるのです。

さて、今朝はダビデから私たちはどんな姿勢でだれに対して祈るのか、その祈りの原動力とは何か、祈りを通してどんな確信をもつことができるのかを考えました。皆さん、このダビデの祈りと自分の祈りの生活を比べてどうでしょう？確かに、私たちは祈りに難しさを感じることがあります。しかし、私たちが祈るのに必要な祈りの原動力である恵みも、うめき声に耳を傾けてくださる聖い神も、私たちに喜びを与えるそのすばらしい主の約束も、私たちにはもうすでに与えられているのです。

問題は、私たちが実際に祈るかかどうかです。最初に取り上げたマルティン・ルターも「祈りは難しいことだ」と言っていました。しかし、彼はこうも言っています。「今日、私には数多くのやるべきことがある。だから、最初の三時間は祈りに使おう。」と。彼はどれだけ忙しくてもどれだけやるべきことに追われていたとしても、祈りは自分にとってどれ程必要なものなのか、どれ程すばらしいものなのか分かっていました。だからこそ、主の前に静まり祈ったのです。

兄弟姉妹の皆さん、私たちにとっても祈りは大切なものです。では、そうであるなら、私たちもダビデのように祈ることです。そうすれば、私たちの祈りの生活は私たちの心に益々喜びをもたらすことになるはずで、ともに、祈ることにおいて成長していきましょう。